

Cさん： 続いて（シーカヤックの体験を担当している）NPO法人「YASU海の駅クラブ」の紹介をさせていただきます。

海の駅クラブは、平成14年の高知国体の際、ヨットの大会を今の旧手結海水浴場のところで行ったことから始まりました。まず艇庫を作って、スロープも作ったのですが、国体後にも生かせる施設にしたいということで、なるべく会場は仮設で済ませ、現在のような施設を作りました。

そこでせっかく作ったものを今度どうしていくかということで、有効に使うためにNPO法人「YASU海の駅クラブ」を作り、法人化したのが平成16年です。現在の会員数は個人、家族を入れて90名、団体が8団体、賛助団体が2法人ということです。

海の駅クラブの目指すところは、まずは、やはり、子どもたちが、楽しくマリンスポーツに親しめるということで、今、B&G財団に「YASU海洋クラブ」として登録しております。そして、「出前ヨット」というかたちで小学校などへも行っております。

次には、ハンディキャップのある方に対する活動です。先日、アクセスディンギーという、風が大きくきてもこけないというヨット、障害者でも誰でも乗れるというヨットを使用して、アクセスディンギーの高知大会第1回目を開催しました。キャッチフレーズは「HAND IN HAND」です。「HAND IN HAND」というのは障害のある方もそうでない方も、皆が手を握り合ってできるという意味と、そして、この地域が手結（てい）ということで、その名前も掛けての意味があります。参加艇が25名ほどでした。ただ、ボランティアスタッフとして、うちの会員以外に、高知大のヨット部の生徒もボランティアとして参加していただいて28名で対応し、いかに大変かということをご理解いただきたいと思います。

また、お年寄りにもカヌーなどを楽しんでもらい、「いつでも誰でもがマリンスポーツに参加、楽しむ」ことをテーマに、この海の駅クラブは運営されています。さらに、「機会と環境を、安全に提供する」、それが一番大事だと心がけています。

<「広める」活動>

まず先ほども説明した、子どもたちのために学校のプールでヨットとカヤック。まず子どもに海に親しんでもらうため、小学校などへ出向き、プールでカヤックとかヨットの体験してもらおうということを行っております。そういうふう子どもたちにまず触れてもらい、海でやればもっと楽しいと思ってもらえればと思っています。

我々の夢は、ここから国体選手を出したいというものです。そのためには、やはり小学生のうちからヨットに対する興味を持ってもらおうということが必要だと思っています。ですから、香南市の小中学校でマリンスポーツ体験ということで、カヌーを教えたりとか、ヨットに乗っていただいたりということをやっております。夜須中学校にはヨ

ット部もできまして、全国大会で今年も2位という成績を収めております。

また、ただのマリンスポーツだけではなく、イカダの体験というのも今年新しく取り入れました。タイヤチューブをいくつも組んでイカダを作り、海へ出て行くということを経験してもらいました。

<「高める」活動>

「広める」の次は、やはり先ほど言った国体選手を出すような「高める」というかたちで、「香南市長杯・龍馬カップ in KOCHI」や、「ヤ・シカヤックマラソン大会」を開催しています。

その他、海辺の学校「マリンスポーツ学科」や「大人のヨット教室」、シーカヤックの指導者や救急救命の指導者、また船舶免許が取れるようなそういう講習会なども行っております。

<「支え合う」活動>

あと、県の障害者スポーツセンターとか香南市の社会福祉協議会さんと協力をして、障害者の方にも、マリンスポーツを楽しんでもらう取り組みもしています。年々マリンスポーツへの障害者の参加者は増えております。ヨットへ2人乗ると、障害者の場合は、親はそこで子どもから目が離せず自分は楽しめないということがあったのですが、ここでは保護者も同じヨットへ乗って楽しめ、いつも障害者の世話をしなければいけないという思いから解放される。ここへ来ると自分も楽しむことができるとおっしゃってくれています。

それと、不登校児童のマリンスポーツ体験ということで、高知県の心の教育センター、香南市にあります不登校児童の支援センターと一緒に、不登校や悩みのある子どもたちに、まず太陽の下へ1回出てみようと呼びかけています。少しずつ参加者も増えてきています。海での体験で少しずつ心が外へ出て行けるようになればいいかなと、我々は心のケアなどではできないわけではないのですが、こういうこともやってみるべきではないかということで行っております。

また、周辺の宿泊施設と、今年協定を結びまして、観光客がホテルの紹介でうちへ来て、マリンスポーツ体験をしていただくということを行っています。

もう海水浴だけではなく、そういう体験型をお客さんが望んでいるところであると思います。我々は少しずつでも、こういうかたちで観光事業へも協力していきたいと思っております。

ただのイベントで終わらないように続けるために、やはり広域的な交流の拡大とか、人、物、情報、地域が一緒になって、皆が和になった情熱で挑戦したいと思っております。